

# さようなら 頭でっかち



## 夢に向かって修業中

北海道から沖縄へ。小畑みのりさん(24)はデザインを学んだ後、2年前から沖縄の伝統染色「紅型(びんがた)」の修業を積む。「手を動かすのが好き。独特の色合いや絵柄にひかれた」。「紅型の技術を生かした舞台衣装も作ってみたい」。夢は広がる。(那覇市) 写真 玉井良幸

銀行や大手メーカーの安定感が揺さぶられ、従来は不安定だと敬遠された、組織に頼らない生き方への魅力が増している。とはいえ、子の行く末を案じるのが親のさがでありつとめでもある。組織への依存度が低い「職人」という職業選択に両親や家族はどう反応したのか。東京工業大で建築を学んだ後、平成建設に入った三橋由希子さん(23)の場合。

## 固い決意、とけ込み早く

「よく『考え込まないでもっと動け!』としかられる。自分なら1日かかる仕事を一瞬でこなす姿は、すくなくかっこいい」。職人の生き様はなんとなく魅力的に映る。レッドムーンで働く北町さんにもそう感じている。「同僚には女性にもてる人が多い。自分是不器用だし、今は仕事一筋だけだ」。

成建設」。7年ほど前から大卒や大学院修了といった学歴を経た若者が続々と「第二入り」し始めた。入社1年目の平山隆太郎さん(25)は転職組。とび職、重機作業、鉄筋工など大工以外の仕事を幅広くこなす「多能工」として修業する。早大大学院を修了して入社した不動産開発会社で施工管理を担当した。ところが「自分がクギ一つ打

金融危機を避け得なかった知の限界が明らかになってきた。職人は頭脳だけでなく、五感を通じてものを考える。そこに心が向かう背景には知性偏重の時代を疑う視点がある。

谷川さんは「靴磨きという職の素晴らしさが認められない」と反論する。「この世界のバイオニアにな

る」気概が支えた。北町悟之さん(28)は革製品好きが高じて職人にまなび、熱中していたバンド活動をやめた24歳のころ、北町さんは埼玉県川口市の革製品メーカー「レッドムーン」で働く友人に就職の相談をした。だが友人は「そんな気持ちで電話してくるな」とはねつけた。

# 実感求め職人世界へ

手仕事をつうじて、みんなの生活に必要な品物をつくる。「U-29(29歳以下)世代」が果敢に職人の世界に飛びこんでいる。100年に1度といわれる世界的な経済不況の時代。複雑な概念と数字の操作からひねり出された巨万の富が必ずしも実体を伴っていないことを、U-29世代は目の当たりにした。虚から実へ。自分の身ひとつでモノを生み出すなりわいが、再び生活のよりどころに浮上している。

攻。同級生はデザイン事務所やコンピュータ関連企業に就職した。しかし小山さんは大工の道を選んだ。仕事を始めて4年目。手はグローブのように分厚い。「重い木の柱や鉄筋を運んでいると手の皮が擦れ

てこんなに腫れてしまう」。大工の手には様々な道具を使いこなす繊細な神経も求められる。「イメージ通り

たなくても建物ができてしまう」。事実には衝撃を受け、「現場でモノに触れたい」と転身を決めたという。

1日40足ほど自分で磨いている。汚れを除き、その靴に合った乳化性クリームを塗って栄養を与える。かわきの後、ワックスや水をつけながら素手で磨く。

革選びから仕上げまで1人でこなす。アトリエからの帰宅は平均で午前2時だという。「ほかの人がOKを出しても、自分で納得がいかなければ、すべてやり直す」と北町さん。職人気質で仕事に打ち込む。

「図面を引ながら考え込むだけの日々より、自分の手でモノをつくりたかった」。木材がむき出しになった建築中の住宅の床に座って、小山卓也さん(27)

は振り返る。武蔵野美術大学で工芸工業デザインを専

に建て付け家具ができた時は達成感はいままでの倍

小山さんが勤めるのは静岡岡部沼津市の建設会社「平

せられた時代だった。だが21世紀に入って環境破壊や